

永禄期の南伊予の戦乱をめぐる一考察

川 岡 勉

(日本史学研究室)

はじめに

近年、伊予の戦国史研究がめざましく進展している。とりわけ重要な点は、伊予の動きを論じる際に、伊予国内に視野を限定するのではなく、近隣の国々である土佐・讃岐・阿波、あるいは対岸の中国地方や九州さらには京・大坂を中核とする西日本全体の動きと関連づけて論じようとする志向が強く現れてきたことである。土佐の一条氏や長宗我部氏、中国地方の大内・毛利・小早川氏、九州の大友氏などが影響力を強める中で、伊予国内の諸勢力は複雑な対応を迫られた。そのような中で、伊予における権力秩序の中心にいた道後の河野氏は、戦国後期以降、芸州と一体化する道を選んでいった事情が解明されつつある。¹⁾ 芸州勢が本格的に伊予に勢力を浸透させる画期となったのは、永禄十年前後の南伊予の戦乱であったとされる。鳥坂合戦という呼び名で知られるこの時期の戦乱に関して、最近次々に詳細な研究が発表されている。朝倉慶景・宮尾克彦・石野弥栄氏らの研究がそれである。²⁾

朝倉氏は、戦国期の南伊予では、土佐の一条氏が西園寺・宇都宮・御荘・河原淵氏ら諸勢力と婚姻関係や養子縁組を通じて勢力を浸透させていたことを指摘する。そして、永禄八年以後、本格的な一条氏の伊予進攻が繰り返されたことを論じている。宮尾氏は、戦国後期の伊予では河野氏を中心に政治権力の再統合がなされ、それまで独立性の強かった宇都宮氏などもその中に巻き込まれていったという重要な指摘を行なった上で、鳥坂合戦前後の政治情勢を分析して合戦の推移を丹念に跡づけている。石野氏は、西南四国の軍事情勢を包括的に検討し、国郡境目地域という特質に規定されて領土紛争が大規模な合戦に発展していった事情を明らかにしている。

これらの研究はそれぞれ南伊予の戦乱や地域社会状況について興味深い論点を提示しているが、この時期の史料をみると、従来の理解に幾つかの修正を要する点があるように思われてきた。私見を提示して議論に加わりたい。

一 高島陣の所在

石野弥栄氏は、一条氏の勢力浸透を四つの段階に整理しながら議論を展開している。①永禄十年の国郡境目付近での合戦、②同年七月に起きた宇和盆地南部の明間合戦、③翌永禄十一年春の高島合戦、そして④同年二月に喜多・宇和両郡境目で起きた鳥坂合戦である。とくに③と④は別の合戦と捉えた上で、①②③④と境目紛争がエスカレートして鳥坂合戦に至ると解釈している。

この中で気にかかるのは、高島合戦の位置づけである。そもそも「高島」がどこにあったのか、従来の研究では明らかでなかった。『土佐国蠹簡集』の編者である奥宮正明や『土佐国編年紀事略』の編者である中山巖水などの近世史家は高島を伊予国内とし、宮尾克彦氏は高島を多田口とする。しかし、いずれも根拠を示して論じたものではない。これに対し石野氏は、かつて『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』を執筆した際には宇和海に浮かぶ高島の可能性を指摘していたが、最近の研究では高島が土佐の幡多郡にあつたとする説を提示している。

石野氏によれば、多田口を含めて伊予の内陸部に「高島」地名は存在しない。「高島」という地名からみて島か島状地形であつたことが推測されるが、宇和海や豊後水道で海戦の形跡はなく、一条氏が水軍を擁していたとも考えにくい。一方、『長元物語』『南海通記』『土佐物語』等の軍記類に来島水軍の警固船が幡多郡の海辺部を攻撃したという記述があり、一定の史実を伝えていた可能性がある。このような考察を踏まえた上で、石野氏は幡多郡の竹島が「高島」であつた可能性が最も高いと結論づけている。来島通康が前年に死去していたため、来島衆は頭領を欠いたまま幡多郡の浦々を席卷し、渡川の河口付近に敵前上陸したと解

釈するのである。

しかしながら、幡多郡から宇和郡に進撃する一条勢、これに対抗して喜多郡から宇和郡に軍を進めた河野・芸州勢という図式の中にあつて、河野氏配下の来島衆による幡多郡襲撃という事態がいささか唐突であることは否めない。二月初めに鳥坂合戦を行なう来島衆が、その直前に幡多郡に船団を進攻させていたとするのはかなり無理がある。「高島」地名が現れる三つの史料を再吟味する必要があるだろう。

A (永禄十一年) 正月十六日源康政奉書⁴⁾

今度者、於高嶋御陣、道後衆懸合稠動候處、刀勝負仕宗徒之者討留無比類思食候、別而可被加御褒美候、弥心懸大簡之旨候也、恐々謹言

正月十六日康政(源)花押)

間崎孫次郎とのへ

B (永禄十一年) 三月十一日小早川隆景書状⁵⁾

一、土州衆此節悉被相催之、一条殿高嶋へ被差出之、今一行短息候哉、両城難儀之際候間、可有左様事候

一、宇和表鳥坂所々無油断様被仰遣、敵行被見合之条、途中迄御出被差延之由、尤無余儀候、我等渡海付而、村越・村河間一人も道後江可被帰之様風聞之条、近比不可然之通申事候、其元責口ノため二こそ出張候間、自余之操八不入事候、

C 永禄十三年霜月十八日 延川村天満宮棟札⁶⁾

去戊辰之歳之春、就于伊予土佐両国之御弓箭、土笏衆・三間衆・両山衆、多田蔵之於高島御番之時、源朝臣教忠王寅歳之依御願再興

也、斯隨願力兩村之衆各々遂叛陣、

史料Aによれば、永禄十一年正月に道後衆（河野氏の軍勢）が高島陣を攻撃したが、一条氏によって撃退されている。史料Bでは、同年三月頃、一条氏は土州衆の大軍を率いて宇都宮氏の拠る両城（大洲城・八幡山城）救援のため高島に進出したことが分かる。小早川側は宇和表島坂所々の油断なきよう警戒を強めており、この直前に伊予に渡海してきていた隆景は敵の動きを見定めるため着陣を延期せざるをえなくなっている。史料Cからは、永禄十一年春の伊予・土佐両国合戦に際して、土州衆・三間衆・両山衆が高島に在番していたことが分かる。在番衆には土州衆のほか、予土国境周辺の三間衆・両山衆などが含まれていたのである。三間衆とはこの棟札にみえる願主源（河原淵）教忠をはじめとする伊予の三間郷の国衆であらうし、両山衆は石野氏が言うように土佐の幡多郡北部の上山郷・下山郷の国衆であらう。一条氏は彼ら予土両国の国境沿いの勢力を味方につけることによって、伊予進攻を実現しえたのである。

以上のように、永禄十一年正月から三月にかけて、一条氏は予土国境沿いの勢力を組織しつつ伊予に攻め入り、高島に前線基地を設けた模様である。これに対抗する河野氏や芸州勢は、高島を攻撃するとともに、宇和表の鳥坂峠付近の守りを固めている。そうすると、高島と鳥坂が双方の軍事拠点であったとみられ、この二地点は遠く隔たった場所にあつたとは考えにくい。史料A・Cは、高島の所在地が鳥坂に近い内陸部の要地であったことをうかがわせ、少なくとも正月から三月までここに一条氏の陣が設けられていたことを物語るのである。

石野氏が高島の所在地をわざわざ幡多郡に比定せざるをえなかったのは、突き詰めると内陸部に「高島」地名が見当たらないという点に帰結

する。ところが、実際には伊予の内陸部に「高島」地名が存在する。

図1は、愛媛県総務部より愛媛県立図書館に移管された行政文書の中に含まれる「喜多郡北只・黒木・乃佐来・稻積・長谷・梅川・松尾・大竹村之図」の一部をトレースしたものである。この図が作成されたのは明治期で、愛媛県第二十二大区四小区を構成する八力村について、山川・道路・村境・組・神社・寺院などを地図上に書き込んでいる。この図の上方、南を宇和郡の白髭村（現在の東宇和郡野村町白髭地区、図1には「白髭村」と書かれている）に接する地点に、喜多郡梅川村（現在の大洲市梅川地区）が見える。そして、梅川村のうち喜多郡と宇和郡の郡境に「高島山」の名を確認することができる（写真1）。

現地を踏査してみたところ、高島山は見晴らしのきく独立状の山塊であり（写真2）、眼下に梅川を見下ろし、北方に北只・大洲方面を遠望する場所にある。山の北側は切り立った崖となっており、岩盤が露出している。そして注目すべき点は、山腹に階段状に重なる曲輪が幾層も取り付いており、各曲輪にはおびただしい石罫が伴つことである（写真3）。愛媛県教育委員会が実施した中世城館跡の分布調査報告書には掲載されていないものの、ここがかなり規模の大きな中世の山城跡であったことは間違いないところであらう。

土佐勢の進攻ルートを論じた宮尾克彦氏は、一条氏が城川町から肱川沿いに大洲に下るルートに加えて、三間盆地から齒長峠を越え宇和盆地を通過したのち鳥坂越えで大洲に至るルートを確保したとしている。宇和盆地の松葉・東多田・久保から鳥坂峠を越え、稻積・北只を経て大洲に達するルートである（図2参照）。図1に見える宇和島往還がこれにほぼ相当しよう。しかし、村上吉継の鳥坂築城により後者のルートを塞がれ、補給や援軍をつけることができなくなったため、一条氏は鳥坂責めに踏み切ったものと解釈するのである。

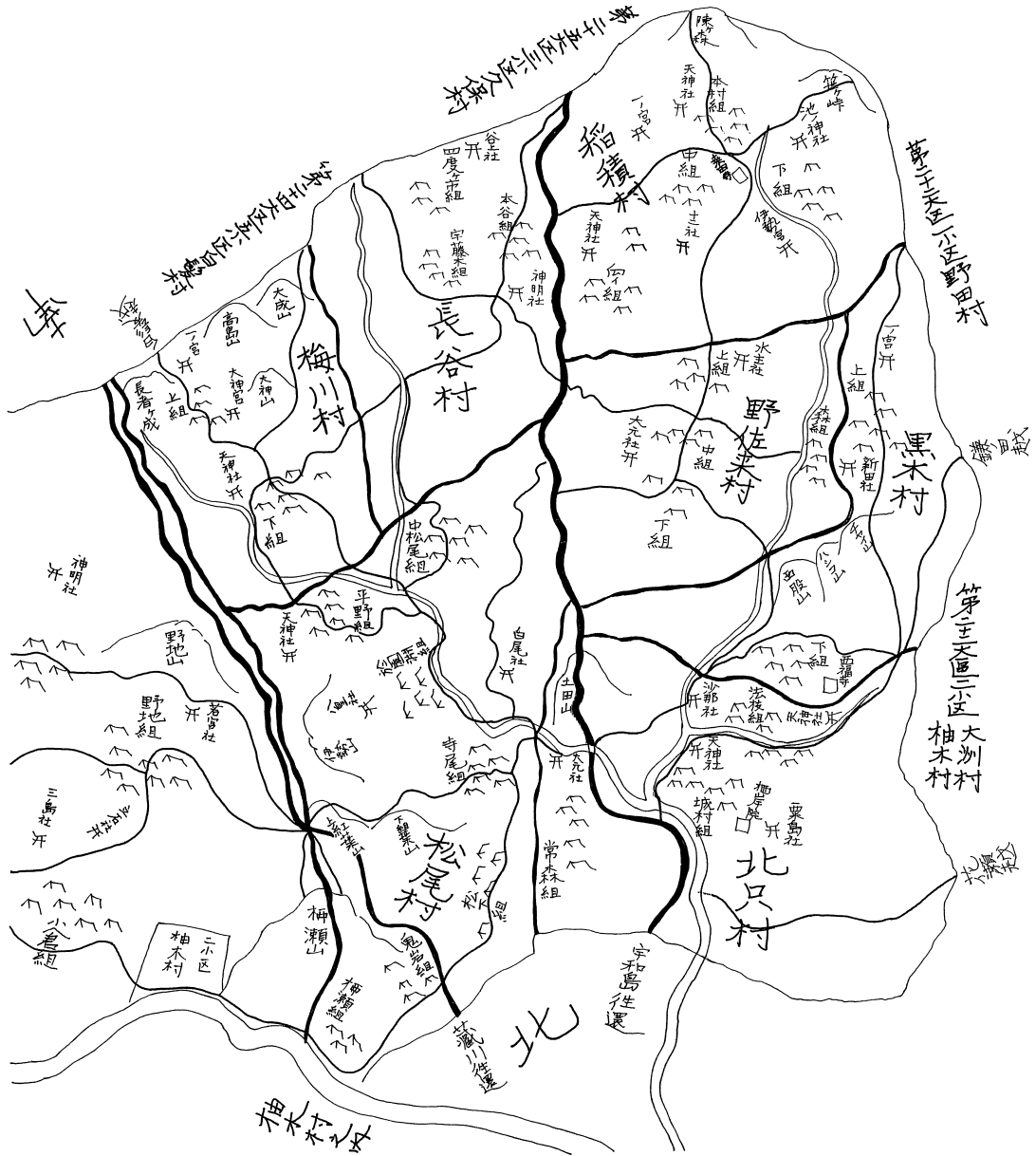


图1 喜多郡北只・黒木・乃佐来・稻積・長谷・梅川・松尾・大竹村之図（部分）



図2 大洲市南部・宇和町北部地図 (×が高島の位置)



写真 1



写真 2



写真 3

鳥坂峠が塞がれて稲積・北只を北上するルートが使えなくなってきたとき、その迂回路としてクローズアップされるのが梅川の位置ではないだろうか。梅川は齒長峠から岩瀬川沿いに北上して山越えした地点であり、図1にも南から梅川村に入る道路が記されている。この道路は梅川村の北で二つに分かれ、東に行けば蔵川往還、西に向かえば宇和島往還に通じる。一条氏はこの梅川の高島山に陣を設け、軍勢を在番させたとみられる。大洲の宇都宮氏が孤立する中で、これを救援するために進軍した一条勢が前線基地として確保したのは、梅川の高島山であったと結論づけられるのである。

二 村上吉継の役割と鳥坂合戦

一条氏と交戦した伊予の軍勢の中で、最も重要な働きをした人物に村上河内守吉継がいる。吉継は来島村上氏の有力家臣で、鳥坂合戦では病に倒れた来島通康に代わって来島衆を統率する立場にあった。永禄十一年二月九日、道後の河野通宣は吉継に感状を与え、度重なる吉継の戦功を褒めた。

D 永禄十一年二月九日河野通宣書状写⁽⁹⁾

今度郡内弓箭執企之處、^(平四)房実・通康^(来島)為先勢旁被申付之畢、於所々別而忠儀無比類者也、先以旧冬鳥坂城敵方組多田^(既)可仕捕之趣依相聞、頓馳籠彼要害、堅固被相構之段、忠儀專也、然則被帰路之砌、^(菅)菅田家中之凶徒企錯乱、即時可軍敵心之處、吉繼以才覚、被取鎮之儀、是又不及言語者也、次今度一条方引率数勢有出張、陣捕鳥坂峯寄貴口、彼要害既難儀之砌、為後卷自芸州之人躰乃美兵部丞宗勝其外以密談之首尾、去二日正月森令对阵、同四日、敵陣令見敗北至当陣剪懸之處、被遂防戦、自身依被碎手至親類家来等数多高名之至、令顯然者也、因茲任所存訖、者弥被励戦功、可被專静謐之状、如件、

永禄十一年二月九日

村上河内守殿

(河野)
通宣(花押影)

史料Dからは、吉繼が三つの戦功を挙げたことが読み取れる。一つは、前年冬に鳥坂城が敵方の手に落ちようとしたとき、吉繼がただちに城に馳せ籠り、堅固に守り抜いたことである。二つめは、鳥坂城から帰ろうとした折に、菅田家中で錯乱が生じ、敵に通じようとする動きがみられたのに対し、吉繼の策略でこれを鎮圧したことである。三番めが、今度の一条勢の鳥坂責めに際し、後卷(後詰)して芸州方の乃美宗勝らと密談を重ね、二月二日に正月森に対陣、同四日に敵の襲撃を防いで撃退したことである。鳥坂合戦のハイライトであった二月四日の戦闘において、吉繼は鳥坂城に籠っていたのではなく、後巻して正月森の陣にいたことが判明する。

以上のことを踏まえて、南伊予をめぐる情勢を再構成してみよう。

『予陽河野家譜』によれば、永禄八年、豊後大友氏は土佐一条氏と通

永禄期の南伊予の戦乱をめぐる一考察

じて宇和郡を攻撃したとされる。この頃から、一条氏の南伊予進攻が繰り返されることになる。このような中で、永禄九年の夏より郡内境目で錯乱が生じる。これは、郡内に勢力をもつ宇都宮氏が河野氏に敵対する動きを見せたことを指すとみて間違いない。そこで、史料Dの冒頭にあるように、来島・平岡両氏が先発部隊として郡内に出陣することになる。翌十年の二月頃から、来島と平岡は喜多郡の国人の組織化に努めていたことが史料で確認できる。三月四日には大洲北方の上須戒の城を宇都宮方より奪い取ることに成功したようである。⁽¹²⁾

一条氏は、郡内で孤立しつつある宇都宮氏を救援するために軍勢を北上させた。永禄十年七月、一条氏の家司である源康政は宇和郡の明間兵部丞に明間合戦における忠節を称える奉書を発した。⁽¹³⁾一条氏の勢力が三間盆地を越えて宇和盆地の周辺にまで到達したことがうかがえる。

これに対して、来島・平岡の軍兵が三間に乱入したらしい。年欠九月晦日付の源康政書状は、来島・平岡の乱入を長宗我部元親に伝えた文書である。⁽¹⁴⁾この文書の年代について、『土佐国編年紀事略』は永禄九年のこととし、宮尾氏もこれを採用するが、石野弥栄氏は永禄十年に比定している。来島・平岡の南予における活動時期からみて石野説の方が妥当性が高い。また、来島衆らが乱入した場所に関して、この文書を載せる『土佐国編年紀事略』が三間、同じく『土佐国羣簡集拾遺』が立間となっており、宮尾氏は立間説を採用する。しかし、文書の内容が伊予勢に備えるため長宗我部氏の下山境目への出兵を要請したものであり、土佐の下山郷が予土国境をはさんで伊予の三間郷に隣接する地域である以上、来島衆らが乱入したのは当時一条氏の勢力下にあった三間とみた方がよからう。

九月二十一日、来島・平岡は土佐より大洲に至る街道沿いに二つの城を確保した。⁽¹⁵⁾さらに、来島は安芸吉田に下島次郎左衛門を派遣し、小早

川勢の出兵と小早川方による一城確保を要請した。伊予からの懇望に対して、小早川隆景はこれを承諾し、備後外郡衆二百余に出陣を申し付け、一族の梨子羽氏らには十月十八日に渡海するよう準備を命じている。伊予国内の紛争に際して、小早川氏の加勢を得なければ事態を収拾できない状態に陥っていたことが読み取れる。しかも、まもなく南伊予に出張していた来島通康が病に倒れるというアクシデントにも見舞われた。十月二日に道後に戻った通康は、戦列に復帰することなく死去してしまうのである。⁽¹⁶⁾

十月十三日、「彼（大洲）表大事之儀候」という認識を抱いた小早川隆景は、来島が再起不能であることを知って、「加勢等重畳差渡候へ八更以不被捨置儀候条、此方手前之弓箭二罷成たる迄候」と述べている。⁽¹⁷⁾ 援軍を派遣した以上は捨ててはおかず、手前（小早川）の合戦として軍事行動に取り組むというのである。但し、小早川側も難問を抱えていた。伊予の事情に詳しい乃美宗勝がこの時期九州出陣中で、直ちに呼び寄せるわけにいかなかったことである。隆景は「吾等事八与州表之儀無案内之事情、何共不及才覚候、来嶋親類中下次已下迄一段心遣と聞え候、可有御察候」と、九州の宗勝に申し送っている。伊予の事情に無案内であった隆景は、通康亡き後の来島親類衆に依存せざるをえなかったのである。⁽¹⁸⁾ このような中で、来島衆、とくに村上吉継の存在がクローズアップされていくことになる。

十一月三日には、隆景は宗勝に宛てて「予州表之儀、此方加勢緩候者不慮可有出来候」と述べている。⁽¹⁹⁾ いよいよ小早川の援軍ぬきでは立ち行かぬ状況になってきたのである。この書状には、大野氏と村上吉継ら来島衆が一城を取り付けることを隆景へ申し伝えてきたとも書かれている。また、肱川の河谷ルートをおさえる津々喜谷要害（滝之城）に置く番衆の件で来島衆と小早川方が内談していたことも見える。吉継をはじ

めとする来島衆は、小早川と緊密に連絡を取り合いながら軍事行動を展開していたのである。

土佐勢は、宇和盆地を通過して喜多郡突入にさしかかっていた。後述の乃美宗勝言上状には、「従土州為宇都宮勢出張、宇和郡衆・三間郡衆・西苑寺殿、雖為河野一味、近年土州衆四州之寛不浅、因歎不屑、右之両郡、一品西苑寺殿、於多田張宿陣、組宇都宮被軍其行」とあり、三間の勢力のみならず西園寺氏まで一条方に靡いたことが述べられている。⁽²⁰⁾ これに対して、「芸予両国之輩、為土州衆出口請手、執誘鳥坂峯、人数辨当差籠之、成堅固調儀」と記されるように、芸予勢は土佐勢の進攻ルートを塞ぐために鳥坂峰に城郭を築いた。⁽²¹⁾ こうして、鳥坂峠周辺は両軍が総力を挙げてぶつかり合う激戦地となるのである。

前掲の史料Dに見られるように、鳥坂城が敵方（土佐方）の手に落ちようとしたとき、村上吉継は鳥坂城に乗り込んで立て直しをはかった。このあと吉継は、帰路に菅田家中の反乱を鎮めている。土佐勢の圧力が強まる中で、鳥坂城や菅田城などが不安定な事態に陥っており、それを芸予方に引き戻した点で吉継の戦功が高く評価されることになる。

鳥坂越えで大洲に進攻するルートが塞がれる中で、一条氏が迂回ルートに確保した前線基地が梅川の高島陣であったと思われる。一条氏はこれを拠点として、孤立する宇都宮両城と連絡を取り合おうとしたのである。永禄十一年正月、道後衆が高島陣に襲撃をかけたが、一条方はこれを撃退することに成功した。⁽²²⁾ この頃になると、小早川隆景は因島・上関などの軍勢にも伊予渡海を命じており、九州からは乃美宗勝を呼び寄せたようである。

同年二月、一条氏は鳥坂城の総攻撃に取りかかった。史料Dから読み取れるように、この合戦において村上吉継は後巻（後詰）して乃美宗勝らと密談を行ない、二月二日には正月森に陣をすえている。吉継は二月

四日の戦闘においても正月森で敵の襲撃を防ぎ、それにより来島親類・家来衆の名声を高めたという。正月森の位置については、『宇和旧記』に「其後詰二、多田南方堺、正月ヶ森被取候、則其城へ土州衆被懸切候、土州衆倒、第一者、各被打死数不知候、道後衆・松葉衆、勝利不及申候」という記事が見えることからして、宮尾氏の指摘する通り、西方の鳥越峠付近であったと推測される。

宮尾氏は対一条氏との合戦に際して「後詰決戦」に勝利したことが河野・毛利方の勝因であったとする。まさしくその通りだと思われるが、氏が吉継を鳥坂籠城軍の総帥とし、平岡率いる道後衆や乃美宗勝率いる中国勢を後詰軍とした点は修正を要する。後詰決戦で最も重要な役割を果たした人物こそ村上吉継であり、それゆえに吉継はこの合戦の最大の功労者とみなされることになったのである。

注意されるのは、吉継率いる来島衆と小早川氏との緊密な結びつきである。小早川隆景に加勢を求めた中心的存在は来島衆であり、一連の軍事行動においても来島衆は小早川に密着しながら活動していたように見受けられる。土佐勢が鳥坂城を総攻撃した際にも、吉継は小早川勢の中心である乃美宗勝と密談した上で、後詰決戦を行なっている。小早川氏は来島衆を通じて伊予に勢力を浸透させることになったとも考えられよう。

三 小早川隆景の伊予渡海

伊予の動静は小早川氏にとって大きな関心を寄せざるをえない事柄であったと考えられる。毛利元就は小早川隆景に宛てて「今度与州へ之儀、来嶋以扶持、隆元我等頸をつきたる事候、其恩おくりにて候ほどに、是程本望なる事八候八ねとも、此段を存候者一人としてあるましく

候、今度与州之御弓矢者、隆景之御弓矢二てこそ候へと、此家中之者共者、諸人・万人申事候、心得置候条、弥以無申事候」と申し送っている。²³ 芸州勢の伊予渡海は来島への「恩おくり」であったにもかかわらず、毛利家中の者たちは小早川による戦いと認識していると言っているのである。毛利が厳島合戦における来島の働きに報いるという形で、今度の援軍要請に応じたのが始まりであったのが、やがて小早川自身の軍事行動へと転化していく様子が示されているよう。

同じ書状の中で、元就は「如仰、豊後邊と縁邊之事も、かやうにきれ、又弓矢二成候事、一方八貴所御存分之様、諸人沙汰仕之由候」とも述べている。豊後大友氏との和平が崩れ敵対状態が再来したのは、小早川にとって望ましいものであったようである。宮尾克彦氏は、九州における毛利・大友の対立と、四国における土佐一条の動きが密接に関連していたと推測している。大友氏は毛利軍主力の九州到着をできるだけ遅らせるため、姻戚関係にあった一条氏を動かして毛利が四国に目を向けざるをえなくしたと言っているのである。妥当な見解であろう。氏の言うように、北九州の戦乱に専念したい毛利は四国への軍事行動を起こしたくなかったにもかかわらず、来島の援軍要請を断りきれなかったとみられる。しかし、四国出兵は小早川隆景にとっては大きな意味をもつものであった。

来島通康が病に倒れたのを聞いた隆景が、援軍を派遣した以上は捨ててはおけず、手前（小早川）の戦いとして軍事行動に取り組むと語ったことは既述した。しかし、九州にいた乃美宗勝をすぐに呼び寄せるわけにはいかず、伊予の事情に無案内であった隆景は、来島親類中に依存せざるをえなかった。隆景の期待にこたえて、村上吉継をはじめとする来島衆が重要な役割を演じたことも既に述べたところである。

さて、鳥坂合戦の後も伊予国内の戦乱が収まらない中で、ついに小早

川隆景自身が伊予渡海に踏み切ることになる。永禄十一年二月十五日に発せられた毛利元就・輝元連署状には、来たる二月二十一・二十二日の頃に隆景が渡海する予定であること、吉川元春もやはり渡海し、元就・輝元は二十三・二十四日頃に沼田に出向くことが述べられている。²⁴芸州勢の渡海地点が、小早川の本拠地沼田であつたらしいことも読み取れる。²⁵

二月十五日の小早川隆景書状は、宇都宮両城へは隆景が着陣した上で一度に大勢で責め寄せるべきことを乃美宗勝に指令したものである。²⁶この書状には、隆景の渡海は吉田における毛利と小早川の合議により定まったことも示されている。隆景は吉田を後にしたのち、坂を発して途中で豊島に立ち寄り、吉川元春・福原貞俊・児玉就方らと会談している。²⁷これは「下口警固之人数」(九州に派遣していた軍勢)を伊予に振り向けるよう児玉の了解を取り付けるためであつた。隆景は、その後沼田に帰り、渡海の準備を整えたようである。

しかし隆景の伊予渡海は予定通り進んでいない。三月三日の隆景書状によれば、三月二日に出船しようと思つていたところ、吉川元春・宍戸隆家・吉田衆がなかなか来ないので、これを待つため渡海を延ばすことにしたと言つ。²⁸三月八日の書状では、三月七日の夜に隆家及び福原貞俊ら吉田衆が着津したので、今夜か明日には船出すると述べる。²⁹隆景が宗勝にこの書状を携えて伊予に渡つた使者を御奥島(興居島か)に据え置くように指令しているから、安芸の沼田と伊予の興居島を両国の窓口として連絡を取り合つていたのであつた。

三月十一日の隆景書状によれば、宇都宮両城を救援するため一条氏の大軍が高島へ進出した。³⁰高島が引き続き一条方の重要拠点であつたことが知られる。この時点で隆景は既に伊予に渡海していたとみられ、明日にも大洲口まで出陣したいところではあるものの、吉川・宍戸・福原が

まだ着かないので、彼らが来るのを待ち、諸荷物なども整え、その上順風次第に十三・十四日の頃に着陣すると伝えている。

この後、芸州勢が続々と渡海し、大洲周辺を制圧した模様である。四月二十一日には、「来島合力」のため毛利警固衆が大動員されている。³¹元就の文書に、伊予渡海は来島合力のためであるという認識が示されている点は注意される。

E (永禄十一年)五月六日小早川隆景感状³²

今度予州表之儀、最前有渡海土州衆鳥坂取詰之刻、後卷陣取之儀、悉皆以御行、敵敗軍候、殊令出張、為初宇都宮両城、彼境無残所任存分帰国候、太慶此事候、誠御忠儀之至候、仍太刀一腰國盛進之候、猶岡和泉守可申候、恐々謹言

五月六日

隆景御判

史料Eは、乃美宗勝に送つた隆景書状であるが、この中に宇都宮両城をはじめ、郡内表を残らず制圧したのち、隆景が帰国を果たしたことが示されている。但し、これにより伊予国内の諍論が実現したと言いつてもどうか問題になる。次のような史料が存在するからである。

F 永禄十一年十二月中旬乃美宗勝言上状³³

引卒三備州芸防長衆有数艘艦、左金吾伊予国渡海之事、非可被挫宇都宮遠江守豊綱城郭、抑土佐一条家者、不異武家近代胎作狂華軒栄耀、眼武士、詫宇都宮所縁、被墜名家、絶言語次第也、爰河野・宇都宮両家、連年宿意令顕然、及干戈、併仮芸州之威、欲散河野家鬱憤、勿論芸与両州親昵粧、繁栄倍不軽、恰云恰云、不可不被救之、両家同意令純熟以来、河野勢成動宇都宮知行、則以芸家加勢、河野

連旗珍重云、從土州為宇都宮勢出張、宇和郡衆・三間郡衆・西苑寺殿、雖為河野一味、近年土州衆四州之寬不淺、因歎不屑、右之兩郡、一品西苑寺殿、於多田張宿陣、組宇都宮被置其行、芸予兩國之輩、為土州衆出口請手、執誘鳥坂峯、人數辨當差籠之、成堅固調儀之處、土州衆截懸、無明無突及防戰、尤以請留也、敵圖戰散々、忽土州衆失軍利、雖然、不能歸國、叩多田為芸家衆不可不散々、一不可成共行、以兼諾之旨、促早打、分國各出津之催不廻踵、國旁自身之出張、不例之仁者、不及欺其身、以一族馳走、輛・笠岡・尾道・三原・忠海・高崎・竹原津々浦々出船、去月十日、同日予州興庄嶋渡着、於彼所揃諸勢、急速可有渡海之儀、定洩聞、土州陳於立所敗軍、一条家瑕瑾到來也、多田令現形、土佐境立柄、令注進之事、脚力如打燧急度差寄、大津八幡兩城可切崩之支度、鉄砲・石銃・団子銃仕寄之板、勢籠、温鈍火、尾頸堀入、諸口之執詰無可拔足之様、籠城之輩、消肝懇歎頻不止勝、古于今臨于時乞降不珍々々、悔先非、両要害速去渡、無恙一命、守時日謀歎、此条非無推察、乍去、懇望之一篇、以理致義之所、致開許容、却而垂憐愍、兩城足弱地下人等、成届者共、私才雜具一致無異儀、至下須戒被送出之、起去治義も慈悲有道之所作也、右被聞召度之旨候条、申入候所、如此候、恐々謹言、

永禄十一年十二月中旬

宗勝

史料Fに「敵圖戰散々、忽土州衆失軍利、雖然、不能歸國」と記されており、土佐勢は鳥坂合戦の後も退散することなく、宇都宮氏も引き続き敵対し続けたことが読み取れる。そこで、乃美宗勝は輛・笠岡・尾道・三原・忠海・高崎・竹原など津々浦々から船を動員して十一月十日に興居島に渡り、大洲・八幡兩城に迫った。そのため、籠城衆はついに

永禄期の南伊予の戦乱をめぐる一考察

降参を懇望することになったと言っているのである。

石野弥栄氏はこの文書を矢文のような様式とした上で幾つかの不審点を挙げ、内容は信憑性に乏しいと結論づけている。氏が挙げた主たる不審点の一つは、宇都宮の動静である。史料Eからみて隆景は五月以前に宇都宮の城を陥落させ安芸に帰国しており、六月には九州へ渡海したとみられる。したがって、年末頃まで宇都宮が抵抗を続けていたとは考えにくいとする。二つめは、西園寺の動静である。この文書には西園寺が宇都宮に与同したとされるが、これも信じがたいと言っているのである。

この文書は、冒頭に小早川勢の伊予渡海が宇都宮討伐のためでないことが述べられているように、宇都宮側からの降参の懇望を慈悲をもって許容するという主旨を伝えたものである。そのことが殊更に大時代的で仰々しい文言が使用された理由だと考えられる。石野氏は宇都宮兩城は五月までに陥落していたはずだとするが、必ずしもそう断定できない。

G (永禄十一年)五月十四日小早川隆景書状

就其表之儀、委細承之通得其心候、以下次左最前可為被申越之首尾之条、曾祢動隙明候者、則各可有帰陣之處、只今到来相違之趣候、能々可被仰分候、殊下口之儀此節豊州衆出張二付而自筑前三家切々注進之条、其元之事偏被申理之早速帰宅肝要候、從雲伯茂申来之儀候之条、彼是為相談来十八日至吉田罷越候、当春帰陣依差急之如存知之兩國分等一圓無之条差趣候、猶木玄二申含候、恐々謹言

五月十四日

隆景花押

史料Gは隆景が乃美宗勝に宛てた書状であるが、ここからも読み取れるように、この時期「下口之儀」、すなわち九州の情勢が緊張を高めていた。隆景は宗勝に対して九州の動きに備えるため急いで帰宅するよう

に求めている。隆景が伊予在国中の四月頃に、九州では豊後大友勢が出張するという事態に及んでいたのである。⁽³⁵⁾大友勢の動きは、まさしく芸州勢が伊予に渡って九州の守りが手薄になったのに乗じたものと考えられる。したがって、芸州勢が早々と帰国したのは伊予国内が安定したからではなかった。彼らは北九州の合戦に備えるため、伊予に不安定要因を残したまま帰国せざるをえなかったのではないだろうか。その証拠に、「以下次左最前可為被申越之首尾之条、曾祢勅隙明候者、則各可有帰陣之處、只今到来相違之趣候、能々可被仰分候」とあるように、喜多郡曾根の戦が予定通り進めば速やかに帰陣すべきと定めていたにもかかわらず、事態に変化が見られたようである。

五月九日の六戸隆家書状からは、芸州勢の多くが帰国した後も、小早川家臣乃美新四郎（宗勝弟）・六戸家臣佐々部美作守のように、暫く道後に留まって河野との折衝に当たる者がいたことが知られる。一方、河野氏奉行人の垣生盛周と大内信泰が沼田に渡って六戸との相談を行っていたことも読み取れる。小早川隆景と六戸隆家は伊予国の「取操」のため沼田に逗留していたのである。⁽³⁷⁾七月十九日付の隆景・隆家連署状によれば、伊予の動きが思うようになかったよう、両人はそれぞれ乃美・佐々部を通じて道後に催促を求めている。道後からの返事がないため六戸が帰毛しようとするのを、垣生が沼田に引き留めている様子もつかげえる。一方、毛利輝元の家臣内藤元泰が、「与州表隙明」きて帰国したのは、八月頃のことであった。⁽³⁸⁾

この年七月頃には、河野の働きかけが功を奏したらしく、室町幕府が宇都宮を敵と認定したようである。⁽⁴⁰⁾また、八月十五日には土佐の長宗我部元親が村上吉継に書状を送り、戦いの勝利を祝した。⁽⁴¹⁾これは吉継が郡内下須戒城を切り崩したことを伝えたのに対する返報であり、長宗我部氏が必ずしも一条氏と行動を共にしていたわけではないことをうかがわ

せている。⁽⁴²⁾下須戒は肱川河口部の要地であって、宇都宮方との戦闘が郡内で続いていたことを推測できる。この時期には、小早川隆景は九州で活動しており、伊予の能島武吉なども九州攻めに従軍していた。これに対して、吉継ら来島衆が九州に渡海するのは翌永禄十二年になってからのものである。来島衆はまだ郡内で軍事行動に当たっていたと考えられる。

以上にたどってきたところからみて、土佐一条氏が伊予に影響力を持ち続ける中で、郡内地域で宇都宮両城が持ちこたえていた可能性は十分ありうる。史料Eの内容は決して荒唐無稽とは言いい切れないのである。

次に石野氏が挙げた不審点の二つめ、すなわち西園寺が宇都宮に与同したという点であるが、これもそういう局面がありえなかったとは言いい切れない。朝倉慶景氏の研究によれば、一条房家の女が西園寺公宣に嫁すなど、天文年間までは一条と西園寺の関係は良好であったとみられる。⁽⁴³⁾しかし、敵島合戦以後、河野が毛利に接近する中で、永禄年間には西園寺も一条と敵対関係に転じるようになる。宮尾克彦氏は、永禄十年頃に西園寺の命令が及ぶ範囲は宇和盆地周辺の僅かな地域にとどまり、南予の大部分が一条の勢力圏となっていたことを指摘した上で、一条の勢力が歯長峠を越えて宇和盆地に接近する七月以後、西園寺は一条の配下に属したと捉えている。

そもそも宇和盆地を通過した地点にある鳥坂峠が合戦の主戦場になったことは、一条勢が宇和盆地を通るルートを押さえていた事実を物語っている。河野一味であった西園寺が、一条勢の圧力を受けて敵方に傾き、宇都宮に与同するという事態を想定することは可能である。しかし、まもなく西園寺は河野方に復帰することになる。村上吉継の功績として不安定になった鳥坂城や菅田城などを芸予方に確保した点が挙げられていたように、当時の南伊予の諸城郭・諸領主は流動性を強めていた

と考えられるのである。

なお、十月二日付の小早川隆景書状にも史料Fの内容が史実であったことをうかがせる記述が見られる。乃美宗勝に対して、「道後表村河来鳥衆出頭之由誠可然候、下須戒被相渡、重見衆失之事為調、奥居島可有御下向之由、尤可然候」と申し送っているのである。八月に村上吉継の活躍により切り崩された下須戒城のことが見えるとともに、宗勝には興居島に下向するよう命じたことが分かる。史料Fに見られた宗勝の興居島渡着、そして宇都宮両城の籠城衆の降参に際し、「両城足弱地下人等」を下須戒まで送り出せと命じたことなど、いずれも事実であった可能性が強い。以上のことから、永禄十一年の年末に至るまで、乃美宗勝は小早川隆景の意をうけて伊予の静謐に尽力していたと考えられる。

年欠九月二十六日付の平岡房実・通資父子の連署状には、「愚国（伊予）所々申乱、少々境目乱立候」と述べられている。出雲から帰陣した隆景に対し、「其表御繁多雖令察候、此節別而以御異見静謐候様、御取合頼存候」と依頼するために飛脚を遣したものである。国内のあちこちに戦線が拡大する中で、河野氏は小早川氏の支えなしには伊予支配を維持できない状況が示されていよう。河野氏は芸州勢力と一体化する形で分国統制に腐心していくことになるのである。

おわりに

本稿では、永禄期の南伊予における戦乱に関する従来の理解の再検討を行なった。その結果、一条勢が拠点をすえた高島陣が喜多郡と宇和郡の郡境近くにあったこと、鳥坂合戦に際して村上吉継は正月森に陣をすえて後巻の戦闘を行なったこと、鳥坂合戦や芸州勢帰国の後も宇都宮氏は大洲で抵抗を続け乃美宗勝の再渡海を経て静謐が実現されたことな

ど、幾つかの新たな事実を明らかにすることができた。

一連の経過を振り返ってみて注意されるのは、来島氏と小早川隆景の役割である。本来、芸州勢の伊予渡海は来島への「恩おくり」であり、芸州勢は「来島合力」のために動員されたのである。しかし、毛利家中の者たちは「今度与州之御弓矢者、隆景之御弓矢にてこそ候へ」と認識し、隆景自身も来島通康が病に倒れる中で、「此方手前之弓箭二罷成たる迄候」と述べている。河野氏や毛利氏ではなく来島氏と小早川氏の問題として捉えられているのは何故か、ここには伊予をめぐる当時の権力配置を探る上で重要な鍵が隠されているように思われる。

この合戦が、土佐一条＝宇都宮方と安芸毛利（小早川）＝河野方の対立を基軸とするものであったことは間違いない。しかし、その周辺には豊後大友氏の策動がうかがえるし、土佐長宗我部氏も独自の動きを開始し始めていた。境目が乱立するという伊予国内の状況は、中国・四国・九州の政治状況と不可分に連動していたのである。戦国期の伊予の動きを西瀬戸地域全体の中に位置づけていく作業がさらに求められる所以である。

注

- (1) 西尾和美「戦国末期における道後湯築城と芸州 芸州家臣の逗留と使者の往来を中心に」、『(4)四国中世史研究』五、一九九九年、同「戦国末期における毛利氏の婚姻政策と伊予」、『日本史研究』四四五、一九九九年、同「穴戸隆家嫡女の生涯と道後湯築城」、『(4)四国中世史研究』六、二〇〇一年（参照）。
- (2) 朝倉慶景「土佐一条氏の伊予進攻について」、『伊予史談』二九五、一九九四年、宮尾克彦「鳥坂城合戦考 永禄年間の伊予における戦国諸勢力の展開について」、『(4)文化愛媛』三五、一九九四年、石野弥栄「戦国末期に

- おける西南四国の軍事情勢 永祿年間の「国郡境目」地域の合戦をめくって」『よど』創刊号、二〇〇〇年。以下、とくに注を付さないで引く三氏の所説は、いずれもこの三本の論文による。
- (3) 石野弥栄「南予の戦雲」、『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』第二編第四章第四節、一九八四年。
- (4) 『愛媛県史 資料編 古代・中世』二〇〇八号。以下、『県史』二〇〇八と略記する。
- (5) 『県史』一〇二六。
- (6) 延川村天満宮棟札（現北宇和郡広見町三島神社蔵）。
- (7) なお「多田蔵之」という文言について、石野氏は多田蔵之助（介）の誤記だとする（石野弥栄「宇和郡境目における戦国期領主の動向と性格」、『よど』四号、二〇〇三年）が、ここだけ個人名が拳がるのはいささか不自然であり、詳細は不明である。
- (8) 「下山事、自伊與国押領」（『大乘院寺社雜事記』文明元年八月十一日条）とあるように、下山郷は国境をまたいで伊予との間わりが深い地域であった。逆に三間郷は土佐の勢力が伊予に侵入する窓口であり、河後森城の河原湍氏が土佐一条氏より養子を迎えたことに示されるように、土佐からの影響が強く及ぶ地域であった。
- (9) 『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 古文書編』所収「藩中古文書」七号。
- (10) 『県史』一〇八一。
- (11) 『県史』一九七二・一九七三・一九七四・一九七五。
- (12) 『県史』一九八九。
- (13) 『県史』一九九三。
- (14) 『県史』二〇〇九。
- (15) 『県史』一九九七。石野氏は、ここに見える二つの城を河野勢が下山口に進攻して築いた城と捉えているが、疑問である。来島・平岡らが進攻したのは三間地域までであったとみるべきである。
- (16) 「来島氏系図」によれば、通康は十月二十三日に病没している（『愛媛県編年史』四）。
- (17) 『県史』一九九七。
- (18) 西尾前掲「戦国末期における毛利氏の婚姻政策と伊予」。
- (19) 『県史』一九九八。
- (20) 『県史』二〇五七。
- (21) なお、宮尾克彦氏は吉継の鳥坂築城により宇和越えルートが塞がれたとするが、前述した通り、吉継は鳥坂城が敵方の手に落ちようとしたとき、これを味方に引き留めるため入城したとみるべきである。そして、鳥坂城を堅固に守り抜いたのち、吉継はこの城から引き揚げていく。
- (22) 『県史』二〇〇八。なお、村上吉継の子息又三郎は「伊予タカラナ」で土佐勢との合戦で戦死したとされる（和歌山県立文書館蔵『紀州家中系譜並二親類書書上』「村上助右衛門」の項）。しかし、伊予国内に「タカラナ」という地名は確認できず、これは「タカシマ」の写し間違いの可能性がある。
- (23) 『県史』一八九九。
- (24) 『県史』二〇一五。
- (25) 『県史』二〇〇五。
- (26) 『県史』二〇一六。
- (27) 『県史』二〇一七。
- (28) 「浦家文書」四二（『大日本古文書 家わけ第十一』）。
- (29) 「乃美文書」一三（『新熊本市史 史料編 第二巻』）。
- (30) 『県史』二〇一六。
- (31) 『県史』二〇一〇・二〇三三。
- (32) 『県史』二〇三三。
- (33) 『県史』二〇五八。
- (34) 『県史』二〇三五。
- (35) 『県史』一八九九。
- (36) 『県史』二〇三四。
- (37) 『県史』二〇三六。
- (38) 『県史』二〇四七。
- (39) 『県史』二〇四九。
- (40) 『県史』二〇四一・二〇四二・二〇四五。
- (41) 『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 古文書編』所収「藩中古文書」一四号。
- (42) 『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 古文書編』所収「藩中古

文書」一五号。

(43) 朝倉慶景「伊予西園寺氏と土佐一条氏のかかわり 天文期を中心にして

」、『伊予史談』二七五、一九八九年。

(44) 『県史』一〇五二。

(45) 『県史』一〇七九、小早川隆景の出雲帰陣の記述からみて、この史料は元
龜元年のものである。

(46) 宮尾克彦氏は、南伊予の合戦の背後に大友氏が関与していた可能性を指
摘する一方、この合戦を機に一条氏が衰退することからみて一番の利益を
得たのは長宗我部氏であったと評価している。

「付記」

「高島」地名の検出にあたって、袖山俊夫氏にご協力いただいた。深く感謝
申し上げる次第である。

(二〇〇三年十月二十三日受理)